

住民。臺灣島の地積は凡そ二千二百五十三方里なるが屬島及び澎湖群嶋を加ふれば凡そ二千二百六十八方里と成るも現住人口は凡そ二百七十萬人なれば一方里の人口は一千一百八十七人にして帝國の平均人口よりは遙に少なしとす而して人口の最も稠密なるは臺南近傍にして北部の臺北、滬尾の地方は之に次がり又本島人に關する本籍人口は男百三十一萬にして女百十六萬なれば合計は二百四十七萬人なり

現住戸口表

三務署及び臺東廳管下の蕃社戸口并に紅頭嶼の調査を缺く

地方	地積	現住戸數		現住人口	
		内地人	本島人一合計	内地人	本島人一蕃社人一合計
臺北縣	二七八、六三	四二九九	二、八四六五	一、四三八九	六八、八〇三六
臺中縣	三三〇、〇〇	八四九	一、六七五四	三、一四	三、八三三〇
臺南縣	三三九、七九	一、八六〇	二、〇三三三	五、二八六	一、九八三三
宜蘭廳	三三三、〇〇	三三九	二、〇三九六	九、三三	二、〇三九六
臺東廳	二四八、〇〇	一三四	九、五二六	五、二五	九、五二六
總計	一、〇三三	七、三九八	五三、九五四七	二、五五八五	二、五五八五

次に明治三十一年中に於て内地人にして本島に來住せしものは九千三百餘人なるが歸住せしものは一千六百餘人に過ぎず又清國人にして來航せしものは三千一百餘人なるが往航せしものは五千二百人に近し教育に關しては臺北の國語學校を始めとし臺北、臺中、臺南に師範學校を恒春、臺東、澎湖嶋に國語傳習所を置き、小學校を六ヶ所、臺北、基隆、新竹、公學校を七十四ヶ所に設けたるが別に私立の塾舎二十九ヶ所の存するあり而して生徒總數は五萬五千餘なり

行政。臺北に總督府を置き臺灣嶋并に澎湖群嶋を管轄せしむ而して同府の長官たる總督は民政部、人事、文書、外事、縣治、警保、土木、衛生、主計、稅務、陸軍、幕僚、參謀部、軍醫部、獸醫部、法官部、監督部、經營部、海軍、幕僚、評議會等と以て中央機關と爲し陸海軍を統率し各般の政務を統理す又地方の行政に就きては臺

生業

獵業

養畜

此の外地方税収入に七十四萬八千二百六十圓ありて支出に六十二萬六千五百四十七圓あり

三九〇

生業。拓地殖民の事業が未だ其の半にも達せざるの今日に於ては生業の發達の充分ならざるは素より論を俟たず而して半開の境遇にある本島は其の生産力を生業發達の通則に違ふことなく主として農業に求むるものゝ如し今左に本土の住民が従事する業務の概況を記述せん

獵業。本業は山地土蕃の最、得意とする所にして、平原土蕃并に熟蕃も亦之に従事せり而して本業に依りて得る所の主要なるものは鹿野雞の類なり

畜禽	北	中	南	宜	東	澎湖	合計
牝	二六四七	一、一八七	九三五	五	二四六六	九二	三、七三三

養畜	黄牛		水牛		山羊		豚		雞		鴨		鵞	
	牝	牝	牝	牝	牝	牝	牝	牝	牝	牝	牝	牝	牝	牝
雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄	雄
雌	雌	雌	雌	雌	雌	雌	雌	雌	雌	雌	雌	雌	雌	雌
合計	八〇五	一、三二四	九三八八	三	七一九八	二、四八	三、四九六六	三、八六三三	五、八六三三	八、二二八五	二、三三三三	三、七三三三	三、七三三三	三、七三三三

漁業 四圍に海岸を扣へたる此の土に於て多少の水産物あるは勿論なれども亦十州島近海の如き豊魚の地に非ず然れども沿海の地に住する人民には多少捕魚を業とし採草を務とするものあり而して漁人は四萬七千餘人にして三十三萬圓の漁獲物あり又養魚池は五千七百餘甲の面積を以て四十四萬圓足らずの収得を與ふと云ふ

製鹽 本業は微々として振はざるが百六十二甲の鹽田に於て二萬石の食鹽を産出せり

林業 本嶋の山岳地方并に未開墾の平原には天然林の存するあるが故に林産物も亦少なからず就中樟腦には多額(二百六萬斤)の産ありて世界無比の製腦地なり而して之に次くものは腦油(百十二萬斤)木材等なりとす

地方	苗栗	新竹	埔里社	臺中	三角湧	新埔	斗六	羅東	合計
樟腦	六八、七五九七	四三、四七四二	四一、一八三二	三四、八五〇九	三三、一八八〇	二四、六七二二	一一、九六〇	八九一五	二〇九、四四〇六
腦油	四四、六四四四	二九、四〇二七	一四、七九四九	一四、五三三三	六、二二三七	二〇、一〇〇	九七七	四、四一〇	一三三、〇七九九

鑛業 本業は未だ盛ならずして總産額は四十五萬圓に過ぎず唯、黄金(二十五萬圓)石炭(十八萬圓)硫黄等の採掘に従事するのみ而して金は淡水河の上流の地に産し石炭は基隆暖々街錫口街等の地方に産し硫黄は臺北附近の紗帽山北投油坑等の地に産せり

農業 本島は土地豊饒にして周歲寒冷に過ぐるの候なきのみならず主要の住民たる支那種族が其の性耕耘を好むを以て本業に従事するものは三十八萬戸百五十八萬人に達し此の地の生業中最も發達せるものは農業なりとすされば耕地は四十餘萬町歩ありて田に二十四萬町歩園に十六萬町歩あり而して農産物の中にて主要なるものを擧げんに米(八百萬石)甘藷(落花生)荳等あり茶(甘蔗)芋麻(黃麻)木藍等あり

甘蔗には赤蔗と竹蔗との二種ありて産地は本嶋の南部即ち臺南を中央とし南は屏東より北は北港までの沿岸一帯にあり

茶樹は北部臺灣に耕種せらるるが茶園は四萬六千四百餘甲に及びて重しに淡水河沿岸の地にあり

落花生 (Anachis hypogaea) は俗に「ナンキンイ」を云ふ。食料の植物にして油に似たる質を結ぶ。食料に供し又落花生油を搾取するに用ふ。

地方	田園		農業者	
	田園	田園兩用	人員 兼業 專業	戶數 兼業 專業
臺北	5,863,316	1,217,700	1,033,333	6,358,877
臺中	10,110,000	1,813,333	2,288,888	3,002,887
臺南	10,110,000	1,813,333	2,288,888	3,002,887
宜蘭	1,000,000	600,000	700,000	800,000
臺東	1,000,000	600,000	700,000	800,000
澎湖	?	?	?	?
合計	33,883,333	6,447,700	7,303,333	13,167,667

農產物	農產物		合計 (糯米)
	山藍(大菁)	木藍(小菁)	
麥及粟	1,666,135	1,298,666	2,964,801
豆類	6,610	3,833	10,443
落花生	6,333,333	2,222,222	8,555,555
胡椒	571	1,142	1,713
甘蔗	1,000,000	1,000,000	2,000,000
甘藷	1,000,000	1,000,000	2,000,000
茶	1,000,000	1,000,000	2,000,000
煙草	1,000,000	1,000,000	2,000,000
苧麻	1,000,000	1,000,000	2,000,000
苧麻	1,000,000	1,000,000	2,000,000
黃麻	1,000,000	1,000,000	2,000,000
山藍(大菁)	1,000,000	1,000,000	2,000,000
木藍(小菁)	1,000,000	1,000,000	2,000,000
合計	1,666,135	1,298,666	2,964,801

良港に乏しきとに由りて其の發達は遅々として顯著ならざりき然れども近年に至りては東洋の貿易が一般に隆昌に趣くと共に本島の貿易も亦漸く旺盛ならんとするもの如し
 貿易の總額に就きては明治二十五年には一千三百四十二萬餘圓なりしが同三十一年に至りては二倍餘に増進して三千萬圓に達せんとせり

年次	物輸		品輸		金銀	
	輸出	輸入	全計	輸出	輸入	輸出
明治三十一年	二二八,七二八	一六八,七二四	二,九七〇,三六三	四〇五,八三三	六〇五,八三三	一,九四,五六五
同三十年	二二七,五二九	一三六,三二七	二,五五〇,一五七	九,九九六	五九,九〇九	三三六,三三三
同二十九年	二二四,〇三六	八六,一〇一	二,〇〇三,三三三	二七,三三三	四四,一〇七	三三三,〇〇〇
同二十七年	二〇九,七九六	八四,〇〇三	一,九〇三,八〇一	二五,七三三	八八,八〇〇	二〇五,六六四
同二十五年	七六四,四四九	五七六,七三九	一,三四一,八六三	一八,七〇九	二六四,七七一	一五九,九五〇

而して輸出品中の主要なるものは茶類米砂糖樟腦等にして輸入品中の重要なるものは阿片支那綿布刻煙草豚等なりとす

年次	輸出品價額類別							年次	輸入品價額種類別										
	烏龍茶	米	赤砂糖	樟腦	白砂糖	包種茶	苧麻		油精	胡麻子	阿片	支那綿布	刻煙草	豚	米	木材	石油	石砂糖	白砂糖
明治三十一年	五九,六八四	二二八,三三三	一四,七九二	九六,一九五	五六,六四五	三三,六七三	三七,八八五	一四,〇九五	一一,四九五	二〇四,四三二	一三七,〇八七	一〇〇,九七九	八七,〇六九	七二,九六三	七二,四八五	四一,二六三	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇
同三十年	六四,四二〇	一七九,九七三	一一四,六二二	一三三,九二六	五三,七三二	四六,〇九〇	三五,三〇〇	六,九七三	二五,三七九	二〇四,四三二	一三七,〇八七	一〇〇,九七九	八七,〇六九	七二,九六三	七二,四八五	四一,二六三	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇
明治三十一年	一五七,〇三三	一〇四,〇三三	七八,八六四	七二,三三三	一八,三三三	四一,八六四	七二,三三三	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	二〇四,四三二	一三七,〇八七	一〇〇,九七九	八七,〇六九	七二,九六三	七二,四八五	四一,二六三	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇
同三十年	一五七,〇三三	一〇四,〇三三	七八,八六四	七二,三三三	一八,三三三	四一,八六四	七二,三三三	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	二〇四,四三二	一三七,〇八七	一〇〇,九七九	八七,〇六九	七二,九六三	七二,四八五	四一,二六三	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇	三三,〇〇〇

豆類

八八六三四

五五七〇四

麥粉

三三六三二

二二七六八四

四〇〇

本嶋の貿易港は安平、打狗、淡水、基隆の四ヶ所なりしが更に、舊港、鹿港、後壠、梧棲、東石、媽宮、東港、蘇澳の八港を加へたり而して通商の高に依りて列記すれば淡水、安平、梧棲、鹿港、東石、等を得るなり

港名	輸出		輸入		全計
	内國産	外國産	外國産	内國産	
淡水	七三八,二六三	七,四九四	九六三,五五九	三三六,〇四五	一七三三,九一七
安平	三三三,五六八	八〇,七〇	三〇六,六七六	三三,〇四五	五八七,四六〇
梧棲	一〇二,二六六	三六	五〇,九三三	一六四,二〇六	一五三,七〇二
鹿港	六二,〇四七	一五九七	八一,九四九	三三六	一四二,九三九
東石	五九,八〇二		五一,〇〇五	八六八	一一一,九五六
基隆	七,二七五	八〇八	七六,三八〇	四五〇	八四,五一七
打狗	二八,〇三六	二二九	三七,二八八	七四三	六六,二七〇
舊港	一三,六四六		三三,〇一〇		四六,五六七
總計	二七三,三〇八	九,四〇四	一,二八二,七一〇	一,六四四,七三七	二,九七〇,三三九

又此等の諸港が取引を爲すは主として清國にして之に次ぐを香港、イギリス、アメリカ合衆國等なりとす、即ち輸出國には清國(一〇八七)、香港(一三八)アメリカ合衆國(五六)、等ありて輸入國には清國(一〇〇九)、イギリス(一六二)、香港(九五)、アメリカ合衆國(八七)、等あり

交通 交通に關する設備は從來極めて不完全なりしが近年大に面目を改めたる所ありて殊に道路及び航路の發達は著しとす

道路は清國に屬せし頃より三條の縦貫線、幹線、四岸、并に二條の横斷線の設けありしも築造の粗悪なる、橋梁なく傾斜強く、車馬の往來は勿論、徒歩者

も亦甚しき不便を感じたりき、然るに我が國の版圖に入りしより爾來軍隊の力に依りて開通せし大道は道幅道面ともに缺點少なく實際上の効用頗る大なり

幹線 基隆—臺北—新竹—苗栗—臺中—嘉義—臺南—鳳山—卑南

西岸線 新竹—後壠—大甲—牛馬頭—彰化

東岸線 基隆—頭圍—宜蘭—蘇澳—新城—花蓮港—卑南

鐵道に就きては北の方基隆より起り南の方恒春に達すべき所謂縱貫鐵道を敷設する豫定なれども目下營業するは北部の基隆新竹間六十哩餘の線にして既に工事に着手せしは臺南附近の線路なりとす此の外輕便鐵道は新竹打狗間百六十四哩并に臺中塗葛堀間(二十九哩)を連絡せり

基隆新竹間の鐵道は光緒十四年(明治二十一年)を以て業を臺北に起し北方は錫口水邊却七堵を経て基隆に達し南方は海山口、桃仔園、中厝大湖口を経て新竹に到りたるが營業を開始したるは同十七年一月なりしも線路の築造橋梁の構造等は甚だ粗悪にして危險も亦少なからざりき、されば本國が我が領有する所と成りしより爾來、本

鐵道

水路

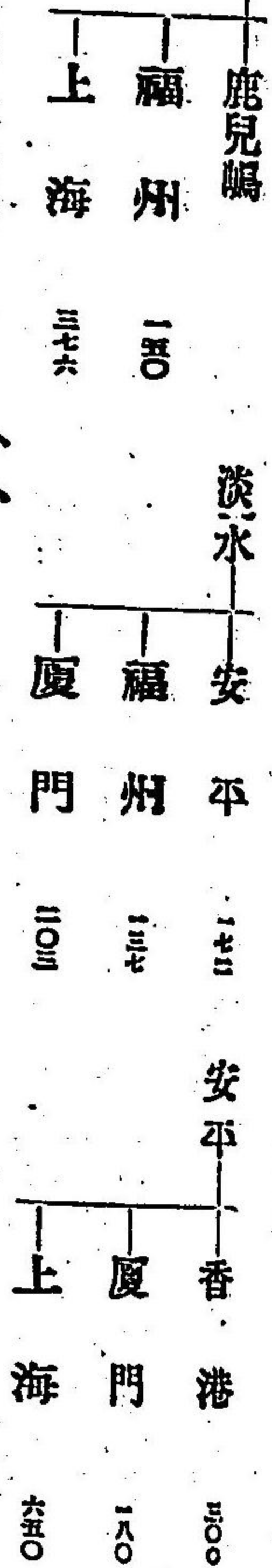
鐵道の改良を企圖せしを以て現今にありては各般の設備は稍整ふに至れり而して淡水河に架せありし大橋の破壊せし後は、臺北基隆間(十九哩餘)及淡水橋新竹間(四十哩餘)の二部に分たる

水路は海路を主とせり蓋し本嶋にありては河流沼池の較は甚だ饒多なるにも拘らず概して細流小池に過ぎざれば通舟の便を與ふるものは極めて少なく通計百里内外なり唯、北部の淡水河及び其の流域には合はせて四十里許の通舟區を與ふ

航路には本嶋の沿岸に於ける各港を連絡するあり基隆より鹿兒嶋若しくは長崎に趣くあり又本嶋の諸港より清國并に香港に達するものあり港に就きては基隆、淡水、舊港、後壠、梧棲、塗葛堀、鹿港、安平、東港、打狗、媽宮、蘇澳、卑南、花蓮、蘇澳、頭圍等あり、船舶には西洋形に五十二隻、一千六百餘噸、日本形及び支那形に六千三百餘隻、八萬餘石あり



基隆 鹿兒嶋



四〇四

郵便は四十六局を有し線路には陸路に道路の百八十七里、鐵道の五十五哩、輕便鐵道の百九十三哩ありて水路に海路の七百五十九哩、川路の十哩あり

電信に關しては四十五ヶ所に電信局を設け陸上線の四百二十四里餘河、底線の八哩、海底線の百六十七哩 安平 延平 基隆 山 福州府 連江縣 百十六哩 五十一哩

臺北

臺北縣

臺北(六二〇〇)は臺灣嶋第一の都會にして城内、艋舺、大稻埕の

三部より成れり、四圍に山嶺を繞らし淡水河の流域に當る平坦開濶の地にあり、少しく北方に偏位するの嫌あるも滬尾、基隆の二港を東西に控ふるを以て臺灣地方の首府たるに適せり、城郭は支那風の古式にして周回一里餘の石壁より成りて殆ど四角形を爲し南に二門、東北西の各一門を備ふるが、城内には總督府を始めとし覆審法院、臺北縣廳、守備混成第一旅團司令

基隆市

部、國語學校并に文廟、武廟、天后廟等ありて、中には構造の壯麗にして觀るに足るものあり、市街は規模宏大にして大街は六間、小街と雖も二間以上ありて普通の支那的市街の如くならず、就中北門街、西門街は最も繁華なるが居住者には内地人甚々多く其の數五千に達せり、艋舺(二四〇〇)は府城の西門外にありて新店河に枕めり、此の地は舊來の碼頭にして商店櫛比し般賑を極むるも街衢の陋穢なるを遺憾とす、大稻埕(三二〇〇)は北門外にありて淡水河に瀕す、艋舺の如く舊來の碼頭にして北臺灣有名の産物たる製茶を集散し商業甚々盛なり、殊に建昌街には外國人の居留するもの多く領事館、商館等の如き煉瓦造の高樓大厦は軒を並べ、中街には本嶋人の所有に係る市店櫛比して豪商大買頗る多し

基隆市は一に鷄籠と記す、臺灣嶋の北東端にありて交通上又は軍事上の要區なるが、臺北を距ること二十哩にして淡水港を距ること海路凡そ五十哩なり、港は東西南の三面に大鷄籠山の如き山岳を控へ僅に北方の一部に於て外海に通じ社寮嶋は港口に横はりて狂瀾怒濤を防止せんとするも港

帝國大地誌

四〇五

形に彎曲の足らざる所あるを以て南西風を避くるに適するも北東風を防ぐを得ざるのみならず、潮流急激なるが故に小體の船舶は出入するに當りて大に困難すと云ふ、此の地に貿易市場を問さしは清曆同治二年^{文久}なるが取引未だ盛なるに至らず、港の南端に砲臺あり要塞砲兵一大隊を駐めしむ街衢は陋穢にして觀るに足るものなきも八千有餘の住民は能く其の業を勵みて風俗も亦淳朴なりと云ふ、**尾街**は一に淡水港と稱す、港は大溪の河口にありて濶きは十七八町に達するも水浅く船舶の碇泊に便ならず、然れども臺北を距ること五里にして清國の厦門を距ること僅に航路一日程に過ぎず、此の地に貿易市場を開きしは清曆咸豐八年^{安政四年}にして爾來漸々隆盛に趣き遂に臺灣開港場中の第一たるに至れり、輸出品の主要なるものは製茶にして之に次ぐものを樟腦とす、市街は淡水河口を溯ること十五町許の右岸にありて背面に山岳を負ひ前面に河流を帯びて遙に外洋に對せり其の風景頗る美なり、住民は六千人足らずありて商業に従事し富豪家多く外國人の居留するものも亦少なからず、**新竹街**(一、八〇〇〇)は農業地にあり

尾街

新竹街

にて煉瓦の城壁を繞らす、目下は鐵道の終點に當れるが稍々繁華なり、**圓山公園**に臺灣神社あり、士林街(四一〇〇)は始めて新式の學校を設けし處なり、枋橋街(二八〇〇)は富森林家の居住するを以て名を知り、新庄街(五二〇〇)は交通の衝に當れり、**新繁華**の地なり、**大科一街**(四〇〇〇)は樟腦の生産地にあり、**社寮島**は基隆港口にあり、七百有餘の住人を有するが北臺灣最良の漁業場とす、**龍島**は社寮島を距ること三哩の處にあり、其の他に花瓶島、棉花島等あり

臺中

臺中縣 臺中は縣廳、地方法院、臺灣守備混成第二旅團司令部等の所在地にして臺灣嶋の中部にあり、元々臺灣省城を設置すべき地として撰定せられたるものなれども開始したるは近年にして僅に土堤の城郭を築きたるのみ、されば住民は四千餘人に過ぎずして未だ完備したる市街を爲すに至らず、然れども城内には考棚、城隍廟等の如き壯麗なる建築あるのみならず、街衢の區劃の存するあるを觀る、又此の地は大吐溪の沿岸にあるを以て風景には甚だ賞すべきものありと云ふ

彰化街

彰化街(一、四〇〇〇)は中部臺灣屈指の都會にして大吐溪の南岸にあり、**帝國大地誌**

街は清曆雍正十二年^我四^{享保}一七三四年の始設に係り、城郭は煉瓦を以て之を築き四門を備ふ、建築には壯大なるもの少なからず、辨務署あり稍、繁榮の地なり、此の地の北隅に聳ゆる八卦山は明治二十七八年の役、我が軍が激戦せし處なり、鹿港街(一七〇〇)は往昔の隆盛を見る能はざるも百貨輻輳して頗る殷賑なり、港は貿易場の一なるが清國福建省泉州府の蚶江と相對し本嶋より渡清するに湏程の最、近き處とす

後、龍街(三三〇〇)は後龍溪の河口にあり、開港場の一なり、苗栗街(三〇〇〇)は辨務署あり、大甲街(三〇〇〇)は大甲溪に顔す、竹繁華の地とす、葫蘆墩街(四七〇〇)は臺中の北西、數里の處にあり、竹繁華の地とす、梧栖港街(三〇〇〇)は開港場の一なり、塗葛堀街は新開の鑛地なるが大肚溪の河口にあり、港は便ならざるも臺灣西岸の定期航路に當り、輕便鐵道に依り臺中を通ず、龍港街(三〇〇〇)は西岸に在りて一小市街を爲せり、北港街(六三〇〇)は竹繁華の地にして辨務署あり、北斗街(五六〇〇)は濁水溪に顔す、辨務署の所在地なり、斗六街(二五〇〇)は一に雲林と云ふ中央の山脈に接す、辨務署の設けあるも土匪襲撃を受くること多く不慮の地なり、埔裡社街(一七〇〇)は山間の地に

あり

臺南縣

臺南(四七〇〇)は本嶋最舊の都會なり、舊と本嶋の首府たりし處にして臺灣と云ひし地なるが、臺灣省を設置せし際に臺灣省城を中部の地即ち臺中に創建せしに依り改らめて臺南と稱することと成りたり、府城は雍正元年^{享保}八^年の創設に係り、周回二里の煉瓦壁を繞らし、四大門三小門の設けあり、考棚、文武廟、城隍廟、兩廣會館等の如き建築の宏壯なるものを始めとし、縣廳地方法院、守備混成第三旅團司令部等の官衙并に寺院、豪商の居宅等多くは城内にありて、樹木の間に隱見し、風色甚だ佳なり、市街は長方形にして長さは一里許あるも幅は半里に過ぎず、道路は狹隘なるも家屋の建築は稍、美麗なり、内郭の東南に當りて海岸に近き處は商業甚だ盛なり、而して市街の周圍に牆壁を繞らして外郭となす、此の地の貿易は隆昌ならざるに非ざるも良港なきが爲に充分の發達を見る能はざるは甚だ遺憾なりとす、然れども砂糖、米穀等の輸出多く又阿片并に其の他の雜貨を輸入するは年々増加するもの、如し、市民の風俗は一般に温和淳朴にして明末の遺風

を存し男子は商業或は農業に勉勵し婦女は織物若くは縫箔を常業とせり而して學事の旺盛なること全嶋第一たり市街の中央并に近傍に往昔オランダ人が築造せし赤崁城其の他數所の墨址あり又鄭成功の廟祠たる開山神社あり

安平港

安平港は臺南の西方凡そ一里の處にあり船舶の碇繋地は海岸を距ること一里許にして砂洲多く波浪常に激揚し殊に南西の季候風に對しては安全を保つ能はず然れども此の地は臺南の附庸港にして百貨輻輳し本嶋重要特産の一たる砂糖の集散を司るを以て殊に蓬船俗にツパンの出入頻繁なり實に本嶋諸港中第二位を占めり貿易市場を開始せしは咸豐九年安政五年にして爾來漸く盛況を呈するに至れり市街は未だ大ならずして四千有餘の住民を有するに過ぎず又本港と臺南との間に於ける道路は平坦にして車馬の往來に便なるのみならず一の運河の通ずるありて貨物の輸送には至りて便利なり嘉義市街一八〇〇は舊と諸羅と云ひしが林爽文の亂後今の名に改む臺南を距ること十里の處にありて交通上の要區たり城郭は石

嘉義市街

打狗港

と煉瓦にて之を築き四箇の大門を設け繞らすに壕渠を以てす城内建築の見るべきものは文廟開障聖王廟羅山書院等にして住人の多くは農業に従事せり打狗港は一名を旗後と云ひ臺南を距ること十五里の處にあり開港場の一なれども港口狹隘にして錨地は水淺く中體以上の船舶は碇繋する能はずされば砂糖を盛に輸出するに際しては商船の輻輳するあるも平常は稍寂寥たるを免れず而して四千足らずの住民は商と農との二業を營めり鳳山は打狗を距ること三里の處にあり城郭は乾隆五十三年我八四層一七林爽文の亂後に創建せられたるものにて官衙を始め寺院商店等は悉く城内にあり此の地は南端臺灣の貨物を集散するが故に商業は稍盛なり抑本地は創設の際は氣候不順にして瘴癘地と稱せられしが今は無害の土と成りて七千足らずの住民は商農に従事するが風俗も亦淳樸なり東港街は七千六百有餘の住人を有す下淡水溪の河口にありて開港場の一なるが産米地にあるを以て米穀を清國に輸出せり

鳳山

東港街

橋仔脚街七五〇〇は附繁華の地なり鹽水港街六五〇〇は鹽水溪に瀕す辨務署の

所在地なり、恒春市街は本島の南端に位するが、辨務署の所在地なり

小琉球嶋は一方里未滿の小嶋にして東港の南四五里餘の海上にあり、西部は断崖を爲し東部に岩礁多く舟を寄するに便ならず、住人は凡そ三千人なるが漁業を事とす

宜蘭 宜蘭(一、六〇〇)は舊と噶瑪蘭と稱せしが清國に宜蘭縣の際に

今の名に改む、本嶋東海岸第一の都會にして、宜蘭廳は城内にあり、土壤膏腴耕種に適するの地にあり、住民中には熱蕃甚々多しと云ふ

頭圍は稍繁華の地なり、蘇澳港は冬季の北風を避くるには便ならざるも、東海岸第一の良港にして有望の地とす

龜山嶼は頭圍の海上八里許に位する小嶋なるが山岳多く平地小なく漁業に通ず

臺東廳 卑南は南郷堡にあり廳地にして卑南溪に瀕す、東海岸の一鎭地

にして一千五百足らずの住人は主として農業に従事し麻、胡麻の類を産す

花蓮港は東海岸の中部に於ける鎭地なり

火燒嶼は四方里の地積を有し卑南を距ること十二里許の海上にあり、住民は農業

に従事す、紅頭嶼は六方里の地積を有す、南岬を隔ること約四十里の海上にあり、住民

はマライ人種なるも本嶋番人と言語、風俗、慣習等を異にせり

澎湖廳 媽宮は一に馬公と記す、澎湖嶋即、大山嶼にあり、軍事上若しく

は交通上、重要な處にして澎湖廳の所在地并に要塞砲兵大隊の駐屯地な

るが、廳城は周圍に堅牢なる墻壁を繞らし、廣袤は各、半里許なり、市街は其

の中にありて凡そ三千の住人を有せり、港は澎湖白沙魚翁の三嶋に挟まれ、

水深く風波の患なくして優に大艦數十隻を泊し得べし、要するに本港は臺

灣地方最良の港なりと斷言し得べし

澎湖群嶋は澎湖嶋地積凡そ八方里を始めとし、漁翁嶋、白礁嶋等、大小五十有餘の嶋嶼より成れり、地勢平低にして三百尺以上に達する處なく、乾燥せる北東風常に吹き荒む

を以て降雨稀にして飲料水は缺乏を告ぐるを以て、従って植物の發育甚を乏しく、區に落

花生、甘藷等の栽培を見るのみ、従って住民(凡そ五萬人)の多數は漁業を主とせり、然れど

も本群嶋は臺灣海峡の中央に位し、東支那海と南支那海との中間に立つが故に軍

事上極めて重要な處とす、加之、近海暗礁多く風浪の厲、險惡なることあるを以て船

舶は安全なる宮港に難を避くるを常とす、而して行政上は本廳を總官に置き出張所

小湖四、小池角大赤坂按網等に設けたり

四一四

中等帝國大地誌終

9/17/37

明治三十三年十二月十八日印刷
明治三十三年十二月廿二日發行

帝國大地誌
定價金一圓貳十錢

東京市本郷區西片町十番地

著者 野口保興



全 市日本橋區通三丁目十番地

發行者 河出靜一



全 市京橋區南傳馬町二丁目五番地

發行者 目黒甚



全 市京橋區弓町二十三番地

印刷者 橘磯吉

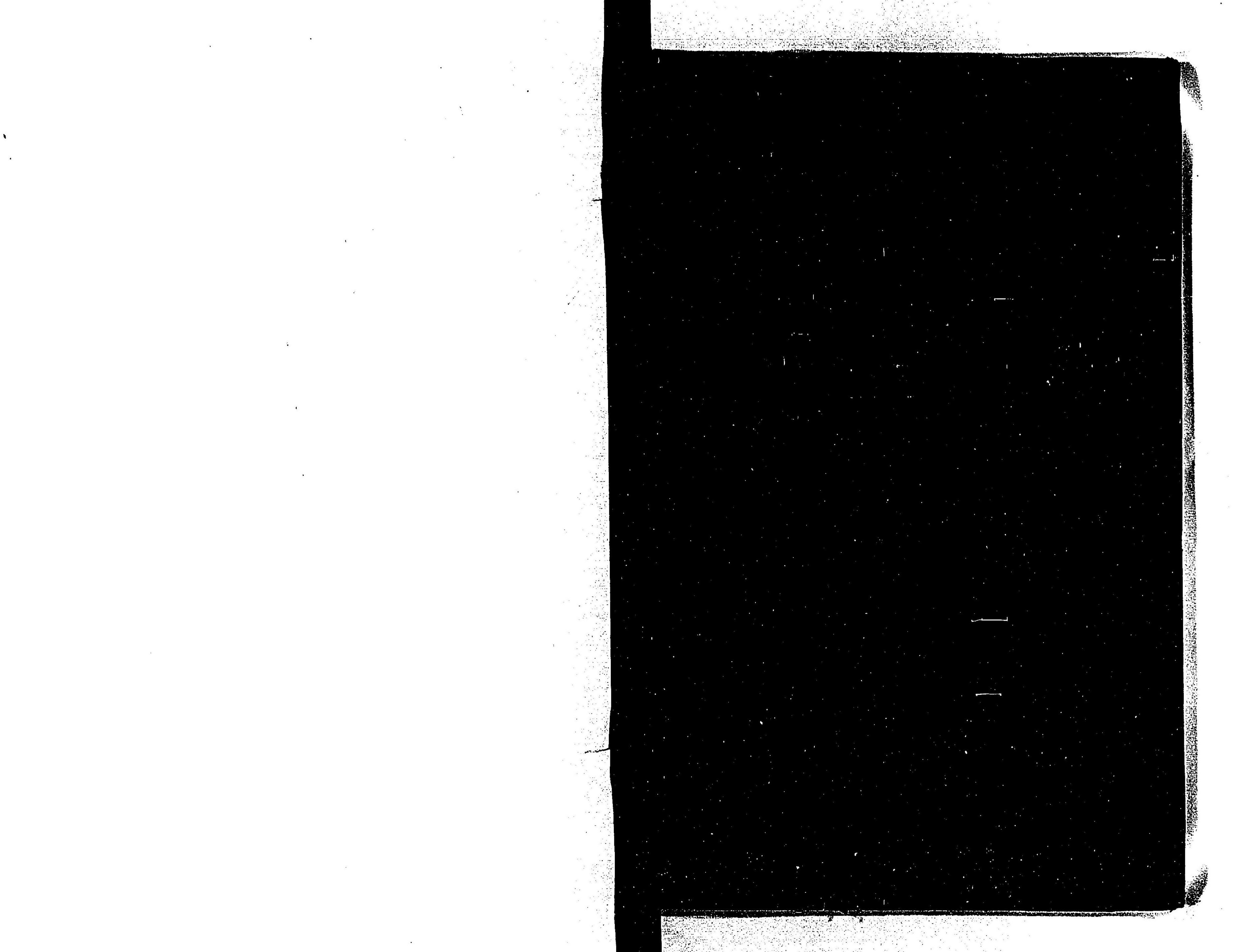
全 市京橋區弓町二十四番地

印刷所 三協合資會社



民國二十六年八月一日
...

90
18



022696-000-3

90-18

帝国大地誌(中等教育)

野口 保興/著

M33

ADB-0472



